St. Luke's International University Repository

教員によるカリキュラム評価

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川越, 博美, 有森, 直子, 射場, 典子, 酒井, 禎子, 小谷野, 康子, 岩井, 郁子, 木村, 登紀子, 熊田, 衛 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/391

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

報　告

教員によるカリキュラム評価

川越　博美[1)]　有森　直子[2)]　射場　典子[3)]
酒井　禎子[4)]　小谷野康子[5)]　岩井　郁子[6)]
木村登紀子[7)]　熊田　　衛[8)]

要　旨

聖路加看護大学では，1995年4月よりスタートした統合カリキュラムについてシステムモデルを用いた多面的な評価を行っている。本調査は，本学教員が統合カリキュラムをどのように評価しているかを明らかにする目的で実施された調査である。

対象者は1999年度に在籍した専任教員42名であり，38名の教員から回答を得た。

調査では，①科目の評価（11項目），②カリキュラム運用に関する評価（16項目）③教員の満足度（7項目）に関する3種類の質問紙を用いた。

調査の結果，教員はカリキュラムの理念を高く評価しており，科目のくくり，順序性，教える学年と時期，科目の必修・選択の区分はおおむね適切であると答えていた。しかし統合カリキュラムとしての科目間の調整，不足している科目，適切な時間数の配分，学習環境，教員数，チームティーチングにおける教員の連携のあり方について課題が指摘された。また教員の満足度は職位による違いがみられた。統合カリキュラム構築に最初から関わった教員は満足度が高く，これは統合カリキュラムの意義や理念に関しての理解を深めることが教員の満足度を高める要因となると考えられた。

今後，教員によるカリキュラム評価を継続的に実施するうえで，学生による科目評価と教員による科目評価の比較が可能であり，また科目担当者が問題や課題を記述できる評価用紙の必要性が明らかとなった。

キーワーズ

カリキュラム評価，統合カリキュラム，看護学教育，質問紙法

Ⅰ．はじめに

聖路加看護大学では，1995年に統合カリキュラムをスタートさせ，1999年3月にこのカリキュラムで学習した学生をはじめて卒業させた。新しい統合カリキュラムを評価し改善に向けて取り組むために，カリキュラム委員会のもとに組織されたカリキュラム評価委員会が中心となり，すべての教員がカリキュラム評価に取り組んだ。専任教員全員が6グループ（①学生による科目評価，②卒業時の特性評価，③卒業時の学生によるカリキュラム評価，④教員によるカリキュラム評価，⑤卒業後の評価，⑥学習者のニードおよび事前能力の評価）に分かれ，カリキュラムを多面的に評価した。

「教員によるカリキュラム評価」グループでは，1999年3月に実施された教員によるカリキュラムについてのグループディスカッションの内容を分析することによって評価を行い，その結果を1999年度の年報に報告した。しかしグループディスカッションではカリキュラムに対する教員一人一人の率直な意見を聞くことが困難であっ

1）聖路加看護大学　教授（地域看護学）
2）聖路加看護大学　講師（母性看護・助産学）
3）聖路加看護大学　講師（成人看護学）
4）聖路加看護大学　助手（成人看護学）
5）聖路加看護大学　助手（精神看護学）
6）聖路加看護大学　教授（看護管理学）
7）聖路加看護大学　教授（心理学）
8）聖路加看護大学　教授（形態機能学）

表1　各質問紙における質問項目

質問紙の種類	質　問　項　目
①科目評価	①科目群のくくり，②大分類のくくり，③不足していた科目，④順序性，⑤教える学年，⑥教える時期，⑦科目間の内容の重複，⑧他の科目の内容の関連性，⑨時間数，⑩科目の名称，⑪選択・必修の区分 以上の11項目について「はい」「いいえ」「わからない」の選択肢を選び，理由を記載
②カリキュラム運用に関わる評価	①教員数，②教員以外のスタッフの数，③教員・特別講師の関わり，④教員以外のスタッフの関わり，⑤図書館の蔵書，⑥教材，⑦教育器材，⑧図書館の運営システム，⑨教室・演習室の数，⑩教室の構造・広さ，⑪実習施設の学習環境，⑫実習施設の確保，⑬学生数，⑭学生のレディネス，⑮教員間の共通認識を持つ場，⑯問題に対処する話し合いの場 以上の16項目について「はい」「いいえ」「わからない」の選択肢を選び，理由を記載
③教員の満足度	①1～2年次に教養科目を集中させ，看護科目が少なくなったこと，②選択科目を多くしたこと，③科目のくくり方，④臨地実習，⑤総合実習，⑥看護学統合，⑦チームティーチング多いこと，⑧1人の教員が担当する学生が複数にまたがること，⑨総合的満足度 以上9項目について，満足から不満足の5段階評価

たことや，教員個人の満足度をグループディスカッションの内容から知ることが困難であったことなどの限界もあった。そこで，今回，グループディスカッションの内容を質的に分析した結果をもとに質問紙を作成し，教員がカリキュラムをどのように評価しているかを明らかにする目的でを行った。

Ⅱ．調査方法

1．対象者：1999年度に在職していた専任教員42名

2．調査期間：2000年3月13日～22日

3．質問紙の構成

①科目の評価，②科目運用上の評価，③教員の満足度の3種類の質問紙を作成した。対象となった教員には①②については，担当している科目すべてについて複数回答してもらい，③については，各教員1部ずつ回答してもらった。各質問紙の質問項目は**表1**に示したとおりである。

4．分析方法

①②の質問紙ともに「はい」「いいえ」「わからない」の度数を算出した。なお③満足度については「不満足」～「満足」までの5段階評価を用い，職位別の評価も行った。また自由記載については項目ごとにまとめ，その内容を検討した。

Ⅲ．結　果

1．対象の特性

カリキュラム評価の対象となった教員42名中，回答のあった教員は38名（90.4%）（教授10名，助教授4名，講師9名，助手11名，職位未記入4名）であった。その教員が担当する科目は，60科目，回答数は162に及んだ（**表2参照**）。うち，カリキュラム改正年度より携わっていた教員の回答は，18（11.1%）であった。

2．科目の評価（表3－1～11）

担当する科目の大分類（教養・基礎・専門）のくくりについては，ほとんどの者が適切であると答えていた。しかし科目群のくくりについては，適切ではない，わからない，未記入の回答が19（12.7%）を占めた。適切ではないと答えた主な理由は，臨地実習と他の科目の名称との整合性，援助論Ⅳが実習に位置づけられない点に関する指摘であった。

担当する科目を教えるにあたって不足している科目があるという回答は，49（30.2%）であった。そのうち科目名が記述されていたものは41あり，複数の教員が不足している科目として取り上げた科目は，薬理（9），臨床検査（8），疾病治療各論（4），統計学（3）であった。

科目の順序性については，122（75.3%）は適切と答えていた。不適切と答えた中で具体的に記述されたものは23あり，そのうちの7が，急性期看護論と慢性期看護論の順序性に関する記述であった。担当科目について教えた学年が適切であったかという問いについては，131（80.9%）が適切と答えていた。不適切と答えた中でその理由が記述されたものは22あり，学年による学生の成

熟度を問題にするのではなく，その内容は科目の順序性に関する内容が多く見られた。教える時期については，126（77.8%）が適切と答えていた。時期が不適切であることについて，具体的に記述されていた科目は23科目あった。

科目の重複については，115（71.0%）が重複はないと答えていたが，32（19.8%）がわからないという回答であった。同様に他の科目との関連性については，111（68.5%）は適切という回答であったが，わからないという回答は33（20.4%）であった。

科目の目標を達成するために必要な時間数については，103（63.6%）は適切と答え，29（17.9%）の担当者は不適切と答えていた。不適切という回答は，期間・時間ともに足りないという記述内容がみられた。

科目の名称については，31（19.1%）が不適切であると回答し，具体的にその内容を記述してある科目は20科目であった。選択・必修の区分については，150（92.6%）は適切と答えていた。担当する科目について再検討する必要があると答え，具体的に記述されていた科目は26科目に上り，内容は多岐にわたった。

表2　回答のあった科目名

科　　目	度数	科　　目	度数
応用心理学	1	看護提供システムⅠ	2
総合英語	1	看護提供システムⅡ	2
英語Ⅰ	2	看護技術論	1
英語Ⅱ	1	生涯発達看護論Ⅰ	3
文献購読	1	生涯発達看護論Ⅱ	5
英語表現法Ⅰ－S	1	家族発達看護論Ⅰ	4
英語表現法Ⅰ－W	1	地域看護論Ⅰ	2
英語表現法Ⅱ－W	1	地域看護論Ⅱ	3
異文化コミュニケーション	1	地域看護論Ⅲ	3
統計学	1	慢性期看護論Ⅰ	9
統計学演習	1	慢性期看護論Ⅱ	2
情報処理演習	1	リハビリテーション看護論Ⅰ	5
対人関係論	2	リハビリテーション看護論Ⅱ	1
健康科学	1	急性期看護論Ⅰ	5
生涯発達論Ⅰ	1	急性期看護論Ⅱ	1
生涯発達論Ⅱ（1年）	2	ターミナルケア論	3
生涯発達論Ⅰ（学士）	2	臨地実習C	2
形態機能学（1年）	2	臨地実習D	3
形態機能学（学士）	2	臨地実習E	2
形態機能学演習	2	臨地実習F	2
集団力動論	2	臨地実習G	3
保健医療福祉行政論	4	総合実習	11
生活と健康（1年）	4	看護研究Ⅰ	1
生活と健康（学士）	1	看護研究Ⅱ，総合看護	10
看護学概論（1年）	3	看護政策論	2
看護学概論（学士）	3	看護ゼミナール	3
看護援助論Ⅰ	3	助産学Ⅰ	2
看護援助論Ⅱ	3	助産学Ⅱ	2
看護援助論Ⅲ	7	助産学Ⅲ	2
看護援助論Ⅳ	7	助産学Ⅴ	2
		合　　計	162

3．カリキュラム運用に関する評価（表4－1～16）

1）教育に携わる人について

自分が担当した科目を運用する上で，教員・教員以外のスタッフの数が適切であったという回答はそれぞれ81（50.0%），72（44.4%）であった。担当教員数が不適切であったと回答していたほぼ全員が，適切な人数への問いに対して，担当した科目を運用する上で具体的に適切と考える人数を記載していた。特に，グループワーク形式の授業形態をとっている科目と実習の科目において現状の担当教員数では不足していると複数の者が回答していた。教員以外のスタッフの活用については，うまく活用できたのは，71（43.8%）にすぎなかった。活用できなかった理由としては，多くの回答者がティーチング・アシスタント（TA）は大学院の時間割の都合で活用が困難であることをあげていた。また，科目の内容を充実できるような教員・特別講師が関わったかについては，93（57.4%）が「はい」と答えていた。「いいえ」と答えた者の意見は学内の教員の連携の再考を希望するものや科目の特徴に合わせた特別講師の必要性についての記述がみられた。

教員間で科目の目標について共通認識を持つ場や問題が生じた時に話し合う場があったと答えたのは70%以上に達した。しかし，科目をよりよく運用しようと思うと話し合う時間が必要であり，複数の科目にまたがっている教員にとっては時間の調整が困難であるという現状や，いくつかの科目では話し合う場の不足が指摘されていた。

2）教育に関するリソース

図書館の蔵書について，適切であったという回答は94（58.0%）であった。不適切と答えた回答者の意見には，グループワークや自己学習，実習などで一度に多数の学生の活用が集中する図書の不足，統合カリキュラムの新しい科目に関連する図書や文献，新しい図書やVTRの不足など，質と量の両面からの必要性が記述されていた。図書館の開館時間などの運用システムについては，70%

表３－１　科目群のくくりは適切か？

	度数	パーセント
はい	143	88.3
いいえ	5	3.1
わからない	8	4.9
未記入	6	3.7
合　計	162	100

表３－２　大分類のくくりは適切か？

	度数	パーセント
はい	154	95.1
いいえ	2	1.2
わからない	1	0.6
未記入	5	3.1
合　計	162	100

表３－３　不足していた科目はあったか？

	度数	パーセント
はい	49	30.2
いいえ	83	51.2
わからない	29	17.9
未記入	1	0.6
合　計	162	100

表３－４　他の科目との順序性は適切か？

	度数	パーセント
はい	122	75.3
いいえ	22	13.6
わからない	18	11.1
合　計	162	100

表３－５　教える学年は適切か？

	度数	パーセント
はい	131	80.9
いいえ	16	9.9
わからない	13	8.0
未記入	2	1.2
合　計	162	100

表３－６　教える時期は適切か？

	度数	パーセント
はい	126	77.8
いいえ	15	9.3
わからない	18	11.1
未記入	3	1.9
合　計	162	100

表３－７　科目間の重複はあったか？

	度数	パーセント
はい	12	7.4
いいえ	115	71.0
わからない	32	19.8
未記入	3	1.9
合　計	162	100

表３－８　他の科目との内容の関連性は適切か？

	度数	パーセント
はい	111	68.5
いいえ	15	9.3
わからない	33	20.4
未記入	3	1.8
合　計	162	100

表３－９　時間数は，科目目標を達成する上で適切か？

	度数	パーセント
はい	103	63.6
いいえ	29	17.9
わからない	28	17.3
未記入	2	1.2
合　計	162	100

表３－10　科目の名称は適切か？

	度数	パーセント
はい	118	72.8
いいえ	31	19.1
わからない	12	7.4
未記入	1	0.7
合　計	162	100

表３－11　選択，必修の区分は適切か？

	度数	パーセント
はい	150	92.6
いいえ	4	2.5
わからない	7	4.3
未記入	1	0.6
合　計	162	100

の回答が適切であったと答えていたが，不適切と回答した理由の多くは，実習中に学習時間を確保するために平日の開館時間と土曜日午後の延長を希望していた。担当科目を運用する上で，教材・教育機器が適切であったと答えたのは，それぞれ64.8%，57.4%と半数以上であった。

教育の場のスペースについては，数，構造・広さともに115（71.0%）が適切であったと答えていたが，グループワークの際，演習室や教室の確保に苦労したという意見が多く見られた。

実習施設は学習環境として適切であったと答えていたのは，89（54.9%）であった。不適切な理由としては，カンファレンスルームの確保ができないことが多く見られた。科目の目標を達成するための実習施設が確保できたと回答していたのは，65（40.1%）にすぎなかった。

3）学生数とレディネスについて

担当科目の目標を達成するための学生数について，適切であったと回答したのは88（54.3%）にすぎなかった。適切でなかったと答えた中には，1学年60人程度の学生数が適切であるとするものやグループワークは10人以下が適切であるとするものが多く見られた。その理由として，現状の教員数でグループワークの運営や実習における指導を行うことの困難があげられた。目標を達成する上で学生のレディネスが支障とならなかったと回答したのは62（38.3%），支障になったと回答したのは67（41.4%）であった。支障となった点としては学生の学習への動機に関連する内容があげられていた。

4．教員の満足度

1～2年次に教養科目群を集中させ，看護科目が少な

表４－１　教員の数は適切か？

	度数	パーセント
はい	81	50.0
いいえ	57	35.2
わからない	14	8.6
未記入	10	6.2
合　計	162	100

表４－２　教員以外のスタッフの数は適切か？

	度数	パーセント
はい	72	44.4
いいえ	42	25.9
わからない	24	14.8
該当無し	4	2.5
未記入	20	12.4
合　計	162	100

表４－３　内容を充実できる教員や特別講師が関わったか？

	度数	パーセント
はい	93	57.4
いいえ	22	13.6
わからない	25	15.4
未記入	22	13.6
合　計	162	100

表４－４　教員以外のスタッフがうまく活用できたか？

	度数	パーセント
はい	71	43.8
いいえ	35	21.6
わからない	34	21.0
該当無し	4	2.5
未記入	18	11.1
合　計	162	100

表４－５　図書館の蔵書は適切か？

	度数	パーセント
はい	94	58.0
いいえ	27	16.7
わからない	29	17.9
該当無し	1	0.6
未記入	11	6.8
合　計	162	100

表４－６　教材は適切か？

	度数	パーセント
はい	105	64.8
いいえ	15	9.3
わからない	30	18.5
該当無し	1	0.6
未記入	11	6.8
合　計	162	100

表４－７　教育機器は適切か？

	度数	パーセント
はい	93	57.4
いいえ	8	4.9
わからない	44	27.2
該当無し	5	3.1
未記入	12	7.4
合　計	162	100

表４－８　図書館の運用システムは適切か？

	度数	パーセント
有効はい	114	70.4
いいえ	12	7.4
わからない	26	16.0
該当無し	1	0.6
未記入	9	5.6
合　計	162	100

表４－９　教室，演習室の数は適切か？

	度数	パーセント
はい	115	71.0
いいえ	26	16.0
わからない	8	4.9
該当無し	2	1.2
未記入	11	6.9
合　計	162	100

表４－10　教室の構造・広さは適切か？

	度数	パーセント
はい	115	71.0
いいえ	23	14.2
わからない	7	4.3
該当無し	3	1.9
未記入	14	8.6
合　計	162	100

表４－11　実習施設は，学習環境として適切か？

	度数	パーセント
はい	89	54.9
いいえ	16	9.9
わからない	21	13.0
該当無し	10	6.2
未記入	26	16.0
合　計	162	100

表４－12　実習施設は確保できたか？

	度数	パーセント
はい	65	40.1
いいえ	7	4.3
わからない	30	18.5
該当無し	20	12.3
未記入	40	24.8
合　計	162	100

くなったことに関して，22人（57.9%）が満足度２以下を示しており（表５－１），その理由としては，３～４年になって専門科目が集中し，学生の余裕がなくなってしまうことや，看護への動機づけが高い時期にもっと看護に触れる機会があったほうがいいということを指摘するものが多かった。また，職位別に見た場合，教授の満足度にはばらつきがあったものの，講師・助手の半数以上は満足度が２以下であった。

選択科目を多くしたことに関しては，満足度４以上が23人（62.2%）で，満足度が１と答えた者は１人もおらず，職位別に見ても全体として満足度は高い傾向にあった（表５－２）。満足度が高い理由としては，学生の自主性・自律性が尊重されることや，動機づけの高い学生に教えることができることなどがあげられていた。

科目のくくり方に関しては，満足度２以下が10人（27.0%），３が10人（27.0%），４以上17人（45.9%）と

表４－13　学生の数は適切か？

	度数	パーセント
はい	88	54.3
いいえ	51	31.5
わからない	11	6.8
未記入	12	7.4
合　計	162	100

表４－14　学生のレディネスは支障とならなかったか？

	度数	パーセント
はい	62	38.3
いいえ	67	41.4
わからない	20	12.3
未記入	13	8.0
合　計	162	100

表４－15　教育間の共通意識を持つ場はあったか？

	度数	パーセント
はい	127	78.4
いいえ	18	11.1
わからない	2	1.2
該当無し	1	0.6
未記入	14	8.7
合　計	162	100

表４－16　問題に対処する話し合いの場はあったか？

	度数	パーセント
はい	123	75.9
いいえ	17	10.5
わからない	8	4.9
該当無し	2	1.2
未記入	12	7.5
合　計	162	100

表５－１　１～２年次に教養科目群を集中させ，看護科目が少なくなったこと

	教授	助教授	講師	助手	記載なし	計
満足度１	1	0	2	4	1	8
満足度２	3	2	3	5	1	14
満足度３	1	2	3	2	2	10
満足度４	3	0	1	0	0	4
満足度５	2	0	0	0	0	2
計	10	4	9	11	4	38

表５－２　選択科目を多くしたこと

	教授	助教授	講師	助手	記載なし	計
満足度１	0	0	0	0	0	0
満足度２	0	1	1	0	1	3
満足度３	3	0	1	6	1	11
満足度４	5	1	5	4	1	16
満足度５	2	1	2	1	1	7
計	10	3	9	11	4	37

比較的満足度が高い傾向が見られたが，職位別に見た場合，教授では全員が満足度３以上をつけているにもかかわらず，助手では２以下が４人，３が５人とほとんどが３以下の満足度をつけており，助手は満足度が低い傾向が見られた（**表５－３**）。満足度が高いことの理由としては統合カリキュラムを評価しているものや，その中で領域外の教員から学びがあることがあげられていた。一方で名称と内容が結びつかないこと，複雑で会議や日程調整に多大なエネルギーを要することなどが満足度の低い理由となっており，くくり方の名称が新任者にはわかりにくいことを指摘している意見も見られた。

臨地実習に関しては，満足度２以下が17名（53.1%），３が14名（43.8%）と，全体的に満足度が低い結果であった（**表５－４**）。その理由として，短期集中で行われており学生も教員も余裕がないこと，短期間の中で学生が必要なことがきちんと学べているのかを疑問視する意見や，臨地実習と科目との関連の整理や統合が不十分であることなどがあげられていた。

総合実習に関しては，満足度２以下が11人（33.3%），３が７人（21.2%），４以上が15人（45.5%）と満足度にばらつきがあり（**表５－５**），また職位による特徴的な差も特に見られなかった。満足度が低い理由としては，実習の積み重ねになっていないことや臨地実習Ｇと時期が重なっていること，また教員側の問題として時間の余裕がない時期であること，実習の目的に合った病棟や人数を決めることの困難などを問題としている意見が見られた。満足度が高い理由としては学生の興味のある分野を深められ，学生が意欲的に取り組んでいることを評価するものがあった。

看護学統合に関しては，満足度２以下が７人（21.2%），３が13人（39.4%），４以上が13人（39.4%）と全体的に満足度は高い傾向にあり（**表５－６**），特に教授では全員が３以上をつけており，満足度が高かった。満足度が高い理由としては，今まで学んだことの統合の場として，またこの科目を通しての学生の成長を評価する意見が見られた。一方で，満足度が低い理由としては講師・助手から，実習をしながら看護研究Ⅱ・総合看護の指導をする時間が限られていること，また学生自身が取り組める期間も短いことを指摘する意見が見られた。

チームティーチングが多いことに関しては，満足度２以下が10人（28.6%），満足度３が17人（48.6%），満足度４以上が８人（22.9%）で（**表５－７**），満足度が３と答えた人が半数近くを占めていた。満足度が低い理由としては，まだうまくチーム化されていないこと，話し

合いの時間や場所の調整をするのに手間がかかることを指摘するものや，学生の中で統一感がなく混乱しているのではということを懸念している声もあった。また，その一方で大変ではあるが他領域の専門性を活かして1つの科目が成り立つことのおもしろさや，他領域との関わり合いを通じてお互いに刺激になり，考え方に広がりや厚みが出ることを述べている意見が，満足度を高くつけた人の中に見られた。

1人の教員が担当する学年が複数にまたがることに関しては，満足度2以下が7人（18.9%），3が16人（43.2%），4以上が14人（37.8%）と全体的に高い傾向にあり（**表5－8**），職位別に見ると，講師・助手の中では比較的満足度が高い傾向が見られた。満足度が低い理由には，さまざまな科目を担当していることで多くの労力が費やされ負担が大きく，また中途半端な感じがあることを指摘する声が上がっており，満足度が高い理由として色々な学生を知り，その成長を追って見られることを評価しているものなどが見られた。

全体としての総合的な満足度についての回答は，満足度1が6人（15.8%），2，3，4がそれぞれ10人（26.3%），5が2人（5.3%）であった（**表5－9**）。職位別に見ると，教授・助教授は，満足度4以上が半数以上を占めているのに対し，講師は全員が，助手でも約80%が満足度3以下であったことから，講師・助手では教授に比べて満足度が低い結果となった。満足度の高い教授の意見としては，大変ではあるものの統合カリキュラムの考え方を評価し，理念に向かって努力しようとする意見が見られたが，満足度が低かった助手や講師の意見としては，行事や話し合いが多いこと，実習・講義が重なることなどによる教員の大変さの実感に言及しているものが見られ，また，満足度3の人の中にはカリキュラムがよくわからない，以前のカリキュラムを知らないので評価できないというカリキュラム自体の理解が不十分であることもあげられていた（注：なお，満足度に関する設問は9項目であったが，全項目に対して回答していない者もおり，質問項目によって回答者数が異なっている。そのため，本文中に記載されているパーセンテージは項目ごとの全回答者数に対する百分率を計算している）。

表5－3　科目のくくり方

	教授	助教授	講師	助手	記載なし	計
満足度1	0	0	1	1	1	3
満足度2	0	1	2	3	1	7
満足度3	2	1	1	5	1	10
満足度4	5	2	4	1	1	13
満足度5	2	0	1	1	0	4
計	9	4	9	11	4	37

表5－4　臨地実習

	教授	助教授	講師	助手	記載なし	計
満足度1	0	0	3	4	0	7
満足度2	2	1	2	3	2	10
満足度3	4	1	4	3	2	14
満足度4	1	0	0	0	0	1
満足度5	0	0	0	0	0	0
計	7	2	9	10	4	32

表5－5　総合実習

	教授	助教授	講師	助手	記載なし	計
満足度1	1	0	1	0	0	2
満足度2	2	1	2	3	1	9
満足度3	1	1	1	2	2	7
満足度4	3	0	4	4	0	11
満足度5	1	0	1	1	1	4
計	8	2	9	10	4	33

表5－6　看護学統合

	教授	助教授	講師	助手	記載なし	計
満足度1	0	0	2	2	0	4
満足度2	0	0	2	0	1	3
満足度3	3	1	1	6	2	13
満足度4	3	1	2	0	1	7
満足度5	2	0	2	2	0	6
計	8	2	9	10	4	33

表5－7　チームティーチングが多いこと

	教授	助教授	講師	助手	記載なし	計
満足度1	2	0	1	1	1	5
満足度2	1	0	0	3	1	5
満足度3	5	2	3	5	2	17
満足度4	0	0	5	2	0	7
満足度5	1	0	0	0	0	1
計	9	2	9	11	4	35

表５－８　ひとりの教員が担当する学年が複数にまたがること

	教授	助教授	講師	助手	記載なし	計
満足度１	1	0	2	0	0	3
満足度２	1	2	0	1	0	4
満足度３	6	0	3	4	3	16
満足度４	0	0	3	5	1	9
満足度５	2	1	1	1	0	5
計	10	3	9	11	4	37

表５－９　総合的満足度

	教授	助教授	講師	助手	記載なし	計
満足度１	1	0	3	1	1	6
満足度２	1	1	1	4	3	10
満足度３	1	0	5	4	0	10
満足度４	6	3	0	1	0	10
満足度５	1	0	0	1	0	2
計	10	4	9	11	4	38

Ⅳ．考　察

１．科目の評価

本学教員は，統合カリキュラムをどのように評価しているのであろうか。今回の調査によって，本カリキュラムにおける科目のくくり方，順序性，教える学年と時期，科目の必修・選択の区分等については，おおむね適切であるという評価が得られた。科目の目標を達成するための時間数については，適切であると答えたのは103（63.6%）であり，29（17.9%）が不足していると答えていた。これは科目の重複や科目間の関連性について適切であると回答したものが約70%前後であったことから，科目間の関連性や重複が適切でないとされる科目がいくつかあり，時間数の不足につながったのではないかと考えられる。今後，統合カリキュラムとしての科目間の調整や内容の洗練についてさらに検討を続け，科目の目標が達成される時間数の適切な配分が求められる。

また，本カリキュラムの構築から携わっている教員が少ないこと，教員自身が学んだカリキュラムと異なるカリキュラムを教授することの理由により，特に教育経験の少ない教員や新任の教員にとっては，カリキュラム自体を理解することにかなりの時間を要していることが推測された。そのため，科目の重複や科目間の関連性については，約20%にわからないという回答があり，自分の担当している科目を超えたカリキュラム全体の評価への参加が困難である現状がうかがえた。このことから，これまでも行われてきたカリキュラム評価に関する新任者のオリエンテーションを強化するとともに，カリキュラムの理解を深めるための研修会などを行う必要性も示唆された。

次に，担当する科目を教えるにあたって不足する科目や科目の順序性については，すでにカリキュラムが運用される経過において，各担当者が評価のための会議を開いて検討し，改善に向けて努力していることが多くの項目で適切と回答されていた本調査の結果からも明らかである。このように不足科目の検討や順序性は，カリキュラム全体の検討結果を待つまでもなく，その運用の過程において，適宜改善していくことが重要であるといえる。一方，科目の名称やそれに関連した科目群のくくり等（たとえば実習と科目の名称の整合性）については，現在カリキュラム委員会，実習担当者委員会などで検討を進めている。この検討は，カリキュラム全体にかかわる側面であるので，時間をかけた慎重な検討を必要とし，運用の途中において容易には変更することが望ましいものではないと考えられる。カリキュラムを評価する際には，これらのことを配慮し，運用の過程で毎年改善をめざして評価する項目と，ある程度の時間を経て検討する項目の判別が必要となってくるだろう。

２．カリキュラム運用に関する評価

今回，カリキュラム運用上の評価を行った結果，３点について現状と課題を考察すると，まず，調査結果より，実習および演習科目を運用する上で必要な教員数が十分とはいえない状況があることが明らかになった。これは学生数の増加という点だけでなく，現在の学士編入生は以前の看護短大卒の編入生と比較し，看護領域の経験はなく，通常の学生と変わらない教育が求められるためであると考えられる。また，教員や教員以外のスタッフ数の不足から，TA をうまく活用していくことが必要であるにもかかわらず，活用が困難な現状があり，今後有効に活用の方法を検討していく必要があることが示唆された。

次に，科目を運用する上での教員同士の連携について，70%以上が科目に関する共通認識を持つ場や問題を話し合う場を持っていると回答していた。連携をとってカリキュラムを運用していくことは科目を効果的に展開する上で重要である。しかし，１人の教員がいくつもの科目に関わっていることで時間調整が困難であったり，時間がとれなかったりという現状の問題点が本調査から明らかになっており，統合カリキュラムゆえ話し合いは必要不可欠といえるが，この現状を改善しなければ教員のオーバーワークにもつながる恐れがあると考えられた。

３点目は，教材・教育機器・図書館の充実が必要であると示唆された点である。すでに，図書館の開館時間の

延長は検討され，実施に移されている。しかし，今後も看護学や教養科目について次々と新たな知見が必要となると考えられ，継続的に教材類を補充・更新していく必要があるだろう。

これらの3点は，本調査の前段階であるカリキュラム評価のためのグループディスカッションのときにも指摘された点（1999年度年報）であった。課題の多くは改善の必要性が高く，教育の効果を考えると非常に重要なものである。たしかに，人的・物的リソースの充実という点は経済的な制約もあるので，当面は現状でできる範囲のことを実施し，今後，長期的な展望に立って改善を検討していく必要があるだろう。

3．教員の満足度

満足度調査の結果，学生の立場になって考えると，カリキュラムの理念そのものは評価が高いものの，教員の立場で講義や実習が重なることによる労力や時間的な余裕のなさといった実際的な負担が大きいことが全体的に本カリキュラムに対する教員の満足度を低くしていた主な原因として考えられる。

また，職位別に見た場合，教授・助教授は満足度が高く，講師・助手は低い傾向があった。この背景を考えると，職位は違ってもそれぞれに大変さを実感しているものの，新カリキュラムの構築・展開に関わっている教授は統合カリキュラムを理解し，その意義・理念を評価できる点で満足度が高くなっていると考えられる。一方，講師・助手は比較的大学での在職年数が短いことから，新カリキュラムをよく理解できないまま，チームティーチングや実習などの実働的な負担を感じやすいことが考えられた。そのため，今後は，教員の満足度を高める要因として，新任教員が統合カリキュラムに関する理解を深めるための話し合いを充実させることが必要であると思われる。その他，教員の負担感の要因となっていると考えられるチームティーチングのための話し合いの時間をどう確保するか，また，実習と他の講義や看護研究Ⅱ・総合看護の指導が重なることによる負担をどう軽減していくかなどの工夫を，科目の評価とともに考えていくことが課題としてあげられる。

4．「教員による評価」質問紙の今後の検討に向けて

今回の調査では，教員が担当した科目ごとの「科目評価」と「カリキュラム運用に関する評価」の質問紙が計6枚，満足度が教員1人につき2枚であったため，多科目にわたって担当している教員は調査用紙の記入にかなりの時間を要したと思われる。今後この評価をシステム化し問題や課題のある部分を確実に改善していくためには質問紙を簡素化すると同時に，改善すべきところが明らかになる質問紙の様式に修正していくことが必要である。また，前述したように，カリキュラムを評価する際，運用の過程で毎年改善をめざして評価する項目と，ある程度の時間を経て検討する項目を区別して評価を行うことが教員の負担も少なく効率的であると考える。

そこで今後の質問紙のあり方には，以下の点が含まれていることが重要と考える。前述の調査結果を見るとおおむね統合カリキュラムの科目には肯定的な評価が得られたが，不足している科目や学習環境，教員数など，課題が残る部分も浮き彫りにされた。今後は本調査結果を踏まえて，運用の経過の中で評価すべき項目を明確にし，問題・課題の残る部分が具体的にあげられ，さらに改善に向けての案を同時に記入できる簡便な質問紙に修正していくことが求められる。

まず質問紙は「教員個人」の意見として記入するものと，「科目に関わった教員のチーム」として話し合いのもとに記入する2つの様式を用いることを提案したい。今回の調査の自由記述で示されたように，教員一人一人がカリキュラムに対して意見をもっていることが明らかになった。「教員個人」による質問紙は，一人一人の意見が十分に反映されるよう，個人が特定されない配慮をする。もう一方の「科目に関わった教員のチーム」への質問紙は，単位認定者と関わった教員で十分に話し合った上で記入する形式とする。チームで話し合うことの利点は，他領域の教員との関わりや意見交換で，よりよいカリキュラムの構築に向けて多角的に評価できる点である。

次に科目の評価については，学生側の科目評価と教師側の評価の照らし合わせが可能な形にすることも必要と考える。Valiga氏から提供されたFairfield大学看護学部における科目評価のガイドライン，2000年3月の科目評価に用いた質問紙の項目，現在学生に対して実施している科目評価の項目なども加味しながら，学生と教師側の両方の認識を同じ項目で問う尺度化した質問項目を考案すること，また科目担当者で問題・課題を記述できる質問項目も含んだ新たな評価用紙を開発することが望まれる。

Ⅴ．おわりに

統合カリキュラムを教員がどのように評価しているかについて，①科目の評価，②カリキュラム運用上の評価，③教員の満足度に関する質問紙を用いて調査した。その結果統合カリキュラムの理念そのものは高く評価しながらも，統合カリキュラムとしての科目間の調整，不足している科目，適切な時間数の配分，学習環境，教員の数，教員間の連携のあり方，連携に伴う負担などいくつかの

課題が指摘された。今後，それらの課題を改善していくとともに，統合カリキュラムの意義や理念についての理解をより深めることが教員の満足度を高めることにつながり，カリキュラム改善に向けての教員の取り組みをより活発にするものと思われる。

また教員によるカリキュラム評価を継続的に実施するためには，評価のための負担を最小限にしながらも適切に評価できる方法とシステムを構築する必要がある。その方法としては，継続的に毎年評価すべき項目と，時間をおいて評価する項目を明確にすること，学生による科目評価と教員による科目評価の比較が可能な質問紙を考案すること，また科目担当者間で検討した課題を記述できる評価用紙を開発することが望まれる。

謝　辞

調査にご協力いただいた先生方，ならびに1999年度「教員によるカリキュラム評価」グループの高見沢恵美子先生，佐居由美先生のご協力に感謝いたします。

参考文献

1）菱沼典子，小山真理子，小島操子他：聖路加看護大学1995年度改定カリキュラムについて，聖路加看護大学紀要，22，113－121，1996.
2）菱沼典子，小島操子：さらに魅力あるカリキュラムの開発に向けて，Quality Nursing，1（2），38－44，1995.
3）1999年度聖路加看護大学年報，聖路加看護大学，2000.
4）Fairfield University School of Nursing: Guideline to Conducting an Oral Course Evaluation with Students, 1997.

Abstract

Evaluation of the Curriculum by Faculty Members

Hiromi Kawagoe, R.N., P.H.N.[1], Naoko Arimori, R.N., R.M.W., M.N.[2], Noriko Iba, R.N., M.N.[3], Yoshiko Sakai, R.N., M.N.[3], Yasuko Koyano, R.N., M.N.[4], Ikuko Iwai, R.N.[5], Tokiko Kimura, M.A.[6], Mamoru Kumada, M.D.[7]

To improve the integrated curriculum implemented in April 1995 at St. Luke's College of Nursing, the curriculum evaluation was performed. The present investigation is performed to know how the faculties evaluate the integrated curriculum by the group specifically aimed at "evaluation of the curriculum by faculty members".

The survey questionnaire was sent to all the 42 full-time faculties as of the 1999 academic year and 38 of them answered.

The survey consisted of the following three sets of questionnaires, (1) evaluation of the subjects (11 items), (2) evaluation of practice of the curriculum (16 items), and (3) evaluation of the satisfaction level (7 items). When making questionnaires, we took into consideration the results of content analysis of group discussion made by faculties in March 1999.

The results are summarized as follows. The faculty members highly evaluated the idea of the curriculum. The subjects are properly grouped, sequenced and taught at the right school year and the term of the year. Whether each subject is compulsory or elective is generally proper. On the other hand, the problems are raised concerning the following points: Insufficient coordination subjects, and the lack of them, improper allotment of the time on them, study environments, number of teachers, and proper team work of teachers especially in the team teaching. The faculty's level of satisfaction was varied depend on their professional position. Those involved in the initial phase of establishing the integrated curriculum are more satisfied with it. It seems to be an important matter for more satisfaction to deepen their understanding of the meaning and idea of the integrated curriculum. To continue curriculum evaluation by the faculty, we need to device the questionnaire available to compare answers by faculty and students, and to develop a new evaluation sheet where faculties of each subject can write them problems and tasks.

Key words

curriculum evaluation, integrated curriculum, nursing education, questionnaire method

1) St. Lukes College of Nursing, Community Nursing
2) St. Lukes College of Nursing, Maternal Infant Nursing & Midwifery
3) St. Lukes College of Nursing, Adult Nursing
4) St. Lukes College of Nursing, Mental Health & Psychiatric Nursing
5) St. Lukes College of Nursing, Nursing Administration
6) St. Lukes College of Nursing, Psychology
7) St. Lukes College of Nursing, Basic Medical Science